

白秋アートギャラリー(11)

白秋と円喬

山田 恵里

白秋といえば、ハイカラ、ロマンチック、西洋趣味。そんな通り一遍のイメージで『桐の花』を読み進めていくと、少し意外な一連がある。「秋思五章」の三番目、「清元」十首がそれだ。どうやら寄席に通い、当時大人気だった娘義太夫の豊竹昇菊、落語の四代目橋屋円喬などに親しんだらしい。落語は一首しか詠まれていないが、それでも落語好きの私としては、白秋と繋がれたようで嬉しい限りだ。

円喬のするりと羽織すべらするからき手つきにこほろぎの鳴く

四代目橋屋円喬は、いまだに落語界でその名跡を継ぐ者が現れないほどずば抜けた名人であった。師匠円朝作の人情噺を得意としていたそうだが、『牡丹灯籠』や『累ヶ淵』といった題は詠み込まれず、声の特徴やリズム、言葉の使い方を描写しているわけでもない。人一倍言葉に敏感だった白秋が、言葉の名人であった円喬を、その方面から切り取らなかつたのはなぜだろうか。

白秋の目に留まったのは、高座に上がって羽織を脱ぐ仕草である。明治時代の映像記録は無いので、するりと滑らせる軽い手つきを想像するしかない。

現代では、故三代目桂春団治の羽織を脱ぐ華麗な仕草が有名だ。私もその端麗な姿は、端正な噺ふりと共に強く印象に残っている。両手でそれぞれの羽織の袖口を掴み、一挙に後ろ手で落とす脱ぎ方を真似してみる噺家も多いという。高座での粋な仕草と言うのは、それほど魅力的なのだ。

そう考えると、江戸時代を舞台にした噺よりも、羽織の粋な脱ぎ方に注目するのは、いかにも洒落者の白秋らしいとも思われる。秋の涼やかな空気に、写真で見るとなかなかシユツとした二枚目の円喬が、羽織の紐を解いてスツと手を抜く仕草はいかにも似つかわしい。折から聞こえてくる蟋蟀の鳴き声も、凜としたたずまいに華を添える。

不格好なラッパの中に首を突っ込んで二、三分怒鳴りこむというお粗末な当時の録音がわずかに残っている。音量最大にしても雑音ばかりで言葉が聞き取れず、到底芸の本質が分かるものではないが、それでも緩急自在のリズムとメリハリが伝わってくる。一人で話しているのに、二人のやり取りにしか聞こえない。シユツとした仕草を見られたのも羨ましいが、稀代の名人の噺を聴くことができた白秋をつくづく羨ましく思う。米朝や枝雀、春団治、小三治を生で聴けた現代の私も、相当贅沢だとは思っただけだ。